
道標の黒星

州兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道標の黒星

【Nコード】

N6632N

【作者名】

州兵

【あらすじ】

弟に刺され、幽霊にジョブチェンジした俺、黒星 透
しかし、幸いにも弟は自首し、供え物を持って、墓前へ足を運んでくれる。

ありがとう、でもそのお墓に俺はいません。何かの歌のようだけど墓にはいません。

刺された、あのリビングにいます。泣かないで下さい。

泣きたいのは、謝りたいのは、俺のほうなんです。泣かないで下さ

い。

幽霊となった俺に二度目のジョブチェンジが行われる。

そう、俺は召喚獣にジョブチェンジした。なんぞ。

プロローグ・幽霊の黒星

ある日、俺は弟に刺された。

果物ナイフは意外と殺傷能力があるんだな

体中熱くて堪らないのに、思考だけが嫌に冷めている。

まず後ろからわき腹を一突き、思わず振り返った俺の胸にもう一突き。

引き抜いた勢いで首に挟りこんだナイフ。

痛みはあるのに感じない、可笑しな矛盾。

傷口が熱くて堪らない。

直前まで酒を飲んでいたせいなのか、曇りがかった頭が重い。

目の前の弟を見る。

助けてはくれないだろう。刺したのは弟だ。

首に刺さったままのナイフを我武者羅に引き抜こうとしている弟が、哀れだった。

「あ、兄貴が悪いんだ 俺がこんなに努力してきたのに
いつもヘラヘラしやがって・・・いつも自分だけうまいこと
やりやがって・・・」

助けを求めるより、謝りたかった。

そんなにも気にしていると思っていなかったから。

落ちたのは第二志望だから、本命だと思わなかったから、笑って慰めていいと思ったんだ。

第二志望が本命だったなんて知らなかった。

親に言われたところを第一志望にしただなんて、知らなかったんだ。

謝りたいのに、声が出せない。

弟が必死になって引き抜こうとしているナイフが邪魔で邪魔で、声が出ない。

さっきまであんなに熱かった体が冷めている。

目が霞んで、弟の顔が見れない。

どこからか父と母の声がする

弟が泣いている

声がでない 目が見えない 体が冷え切った。

意識がとんだ。

あれから数日後、弟はあの後すぐ両親に付き添われ自首した。
カウンセラーらしき人と話をして、泣いていた。

兄が、自分を励まそうとしてくれたことも、本命校のことを言わなかったことも、全部知っていて刺したのだと、泣きながら話していた。

弟は違い、俺は体験していない受験へのプレッシャー、ノイローゼ。色々辛い日々に俺の心無い一言が、弟を壊してしまった。

本当に謝っても謝りきれない後悔。

俺のせいで弟の人生が狂ってしまう。

俺と違って国立へいけるだけの成績をもつ、昔から頭の良い子だった弟

台無しだ

ああ、俺が幽霊じゃなきゃ、声が届けば、謝りたい
体が欲しい。

土下座できるぐらい自由の利く体が、
弟に届く声が欲しい。体が欲しい。

弟が母とともに、俺の墓へ何かを供える。
ゲームだ。

俺と弟が欲しいと、受験が終わったら協力プレイをしようと言って
いたゲームだった。

弟は今も泣いていた。
俺も泣いていた。

触れないと分かっていたながら、手を合わせる弟の膝に縋りついた。
泣きながら謝り続けた。

声は届かない。

それでも、謝り続けた。

再び意識が飛んだ。

意識が戻ると、狭い石造りの部屋にいた。

部屋には年代の違う男が3人、黒いローブを着ている。

真正面に立つ少年に、見えないだろうけど、挨拶代わりに片手を上げる。

ガシヤツ と、金属がきしむ音がした。

思わず自分の腕を、体を見ると、古めかしい甲冑姿だった。

「・・・解せぬ・・・」

「こつちが解せんぞ、異界の生・・・物・・・？」

お互い首を傾げたまま見つめあった。

第一話・渴望の黒星

「お前は・・・生物でいいのか？」

黒いローブの少年が尋ねた
少しづつ後ずさりして、俺から距離をとる

「俺は黒星 透。」

元人間の幽霊、だったんだが・・・」

右手を目前に挙げる

相変わらず、何度確認しても銀色に光る金属

ヨーロッパの騎士の甲冑

生きているかどうか確認されるのも無理は無い

甲冑に取り憑いたのはわかる

だがどうして声が出るのか

オカルト映画や漫画にありがちなテレパシーでもない

生前から親しみのある、自分自身の肉声だった

一体この甲冑の何処から声が出ているのやら
そしてここは何処で、彼らは何者なのやら・・・

「幽霊、アンデットの類か
ならば生物と分類してもよからう、なあクリストフ殿？」

初老の男がクリストフ殿と呼ばれた青年の肩を叩いた
どうやら三人の中で一番立場が上らしい
クリストフ殿の目が媚びた色を見せる

「・・・え、ええ、そのとおりですな
一時は魔力の暴走により、どうなることかと心配しました」

一瞬、憎々しげに少年を睨んだがすぐに俺を見る

何故か気に入られたようだ
新しいおもちゃを前にした子供のような、そんなキラキラとした輝
く目で見つめられる

いやだこのひとこわい

「うむ。無事に召喚できて何よりだ

ジル、ジルベール・キャストライトよ、君は課題に無事合格したおめでとう、奨学金停止処分は取り消された。」

「ありがとうございます副学長！」

二度とあのような問題を起こさないよう精進致します」

ジルベール君が副学長と握手する

それをまた苛立たしげに睨むクリストフ殿

この三人の力関係、友好関係が丸分かりだった

「さて、異界の生物くん・・・クローボッシュ・・・だったかね？」

欧米風の名前から推測するに、日本の名前は発音し辛いようだ

何度か小声で俺の名前を発音しようとかんばる副学長

敬老精神溢れる俺からすれば、おじいちゃん、無理しないでねと声をかけたいところだ

「クロボシです、言い難いのでしたらツールと呼んでください副学長」

お辞儀は通用しなさそうなので、右手で握手する
ついでにさっきからキラキラしっぱなしなクリストフ殿にも握手

「よろしく、クリストフ殿」

「お、おとおおお！？」

よ、よろしく頼みます銀幽の騎士ツールよ！」

ギンユウ？

首を傾げそうになるが兜が重くて動かせなかった

聞き返すにもクリストフ殿は興奮気味に副学長に話しかけている

ふと視線を感じて横を見るとジルベール君がこちらを睨んでいる
どうやら嫌いなクリストフ殿と先に握手したのが嫌なようだ

「よろしく

・・・色々と説明してもらっても、いいかな？」

「・・・ああ、よろしく

説明なら明日してやる

一旦戻すぞ」

戻す・・・って何のことだ、と聞きたかったのに、またまた意識が飛んだ

意識が戻ると、今度は白いテラスのある部屋にいた

やはり目前には少年、ジルベール君がいたが、ローブは脱いでいる

「・・・おかしい

ボクは失敗したはずだったのに、どうして正常に召喚されるんだ・
・・・」

俺がいるにも関わらず頭を抱えている

お願いだから説明してもらいたい

肩でも叩いてこちらの気をひくかね

そう思っているうちに考えが纏まったのかようやく目を合わせた

「おい、召喚されるまえに何かを望まなかったか？」

「望み？・・・望みといえば・・・」

——ああ、俺が幽霊じゃなきゃ、声が届けば、謝りたい
体が欲しい。

土下座できるぐらい自由の利く体が、
弟に届く声が欲しい。体が欲しい。——

俺が望んだもの

「体が、声が欲しい

——そう、望んだ」

「……なるほど、幽霊らしい望みだ

ボクの失敗召喚とタイミングが一致したようだな

媒体である甲冑を与える代わりに、ボクの望みである異界の生物
を引き寄せた」

眉間にしわを寄せて、低くうなるような声
ぴりぴりとした雰囲気居た堪れない

「失敗召喚ね

俺は戻れるのか？」

俺の体となった甲冑

これさえ、これさえあれば弟に謝れる

例え俺だと解ってもらえなくても、何度でも謝ることが出来る！
今すぐ、戻らなくてはならない

弟の下へ、家族の下へ

「何を言っているんだ、昨日戻してやったじゃないか
幽霊は時間の感覚もわからんのか？」

「!？」

そんな!？戻した？俺の意識が飛んだだけだぞ？
しかも昨日？嘘つくなよ、まだ数秒しか経ってないじゃないか！」

思わず肩をゆすりあげて怒鳴る

早く戻らなきゃならないのにそんな冗談やめてくれ

お願いだからやめてくれ

「・・・失敗召喚の・・・弊害なのか？
もしかしてこちらに引っ張られているのか？」

再びぶつぶつと考え込んでしまった

戻れないとか言うなよ

それだけはやめてくれよ

「・・・コレは、仮説にすぎない

ボクは召喚媒体に白銀を用いて召喚術を発動した

だが、ボクの魔力が少なすぎて召喚は失敗
暴走を起こし、すわ爆発かと身構えたときお前が召喚された

媒体となった白銀が消え、お前が、白銀の甲冑が現れた

お前の体となっているその甲冑はその白銀だろう

甲冑の素材となった白銀は我が家に代々伝わる召喚媒体

すなわち、この世界に定着した物質であり固有の物質であるといえる」

早口でまくし立てる

一体何なんだ

ソレが如何したって言うんだ

「体がこの世界固有のもので、魂たるお前は別世界の固有物質

お前はこの体に覆い被さっているだけで、固定されていない

そのせいで体と魂が切り離され、送還がなされず、狭間の領域に
送り込まれた

体と魂の繋ぎがないため、時間を感じることも出来ない

・・・そんなところだろう」

「なら、この体を持って俺の世界へは戻れないってことか・・・？」

「今のままならそうだろう

体と魂を繋ぎ止めるものがあれば

固定できれば、両方の性質をもつことになり世界の行き来が可能
になるだろう」

戻れないわけじゃないんだ

いつか俺は謝れるんだ

固定すれば俺は向こうに戻れる！

「ジルベール君！

すぐにでも固定する術を探してくれ！もちろん俺も協力するさ！」

「無理だ」

「何故だ！？

こ、固定する術はもう失われた技術とか言わないよな！？」

「固定化には大金が必要だ

小国の国家予算なみの金が必要とされる

そして我が家、キャストライト子爵家に金はない

なぜならば

我が家は没落寸前の憂き目にあるからだ

もう一度言わせて貰う

我が家に金はないのだ!」

思案の黒星

金が無い

金が無くては帰れない、謝れない

そんな世知辛い現状

結局、怒鳴りあいの末、お互い資金集めに努めることとなった

ジルベール君は家計のために、オレは帰るために。

この決定事項にオレは頭を抱えることになる

ジルベール君は良いのだ

元から資金集めの手段がある

小遣い稼ぎに論文を研究者に売り払っていたところをスカウトされて学園に入学したとのこと

所謂ゴーストライターという奴だ

これは今でも行われていて、多額の報酬がある

少なくとも、没落への道をマッハで突き進んでいた家計を、現状維持に持ち込めるほどの報酬がある

今は奨学生だが2、3年経てば卒業してもっと安定した給料を得ることが出来る

そう副学長から断言されるほどの能力を持った人間だ

しかしオレはどうだ

召喚されたオレに身元を保証するものはない

職に就くことも出来ない

そもそもこの風貌だ

怪しすぎて誰も雇わないだろう

雇う奴がいたら尊敬する

痛む頭を抱える

だが、そんなオレに手が差し伸べられた

副学長がオレをスカウトしたのだ

異界学の特別講師兼研究対象として

異界学とは何かとジルベール君に尋ねたところ、突如出現する謎の物体、生命体について研究・解析を主とした学問らしい

副学長自ら教鞭をとっているらしく、開講予定の講座に講師として参加して欲しいらしい

渡されたパンフレットには、「異界学講座 異界生物の一例とその思考」という授業に大きく印がついていた

恐らくこれに参加しろということだろう

何故思考がいるのかと尋ねると、会話が可能か、意思の疎通は可能なのか不安に思う受講生も存在するためだそうだ

それもそうだな

納得してパンフレットを読み直す

「後期・・・開講・・・？」

今も傍らで論文を書き連ねるジルベール君を凝視する

こちらの視線に気付いたのか、顔も上げずばそりと呟かれた

「今は前期が始まってまだ一週間目だからな」

・・・別に講師は構わない

快く承諾しよう

問題はこの開講時期だ

後期にあるということは、後期に入るまでの約半年間をどうするのか、だ

「とりあえず月一で副学長と会ってもらおう
研究だから1日束縛されることになるからな」

ちゃんと金も入る

超スピードで羽ペンが動くさまは見事と言っているだろう
思わず見惚れてしまう

月一で研究、後期からは週一で講師

時間を確保するためには長期の仕事は向いていないだろう
なるべく日雇い労働のほうが良い

「オレの世界じゃ、物語で冒険者として金稼ぎってのが王道なんだから・・・」

「そんな危険なこととして壊れたり殺されたりしたらどうする!?!
いや、幽霊だから死なないだろうが、媒体を破壊されたら危ない

研究対象にもならんだろう、却下だ」

「悲しいなあ」

冒険者ギルドに加入して最強☆チートとか少し懂れてただけど

オレにチート能力あるかどうか疑わしいけどな

「冒険者がいるってことは、ギルドとかもあるのかい？」

「あああるぞ

学園内だと五つある

まず、魔術及びそれに関連する研究を主とする魔術ギルド
マッドな魔術師や研究者が多いのが特徴だ

2つめに騎士や傭兵などといった戦士が集う戦士ギルド
このギルドの訓練場で鍛錬し、名を上げるのが目的だな

3つめは貴族ギルド
その名の通り、貴族が集まる、言わば社交界だな

貴族とのコネを作るのに加入するものが多い

4つめは学園内の生活必需品及び嗜好品を扱う商人ギルド

より良い学園生活を送るために数多くの生徒が加入している大手だ

そして最後、これら四つのギルドを統括している学園ギルドだ

ギルドに加入及び依頼するためには、まずこの学園ギルドに話を
つけないといけない

言わばギルドの総合窓口といえる存在だ」

一番安全に金を稼げそうなのは商人ギルドだろうか

大手ならそれなりに雑用があるだろうし、人でも必要だろう

戦士、貴族ギルドは論外だな

マッドが多くて研究のあげく実験死させられそうな魔術ギルドはご
免だ

やはり商人ギルドしかないだろう

ジルベール君が論文を書き上げ大きな封筒に仕舞いこんでいる

「明日の朝、学園へ戻るために出発する

到着は恐らく明日の深夜になるだろう

学園にいたらまた呼び出すから、それまで大人しく狭間でいろ」

「ああ解ったよ

明後日から本格的な学園生活か、青春だね」

「・・・そんな良いものではないがな
ああ、忘れるところだった

固定化のマジックアイテムの値段を調べておいた

金貨7千枚だ」

「・・・ちなみにこの家の生活費は一年でどれぐらい？」

「抑えに抑えて金貨2枚だな

一般市民だと金貨1枚、中流階級の貴族で10～50枚、大貴族や王族は100枚ほどかな」

「日雇いで稼げますか？」

「無理だな」

本当、世知辛い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6632n/>

道標の黒星

2010年10月10日02時14分発行